



微笑みの国 タイ 視察報告

3月26日から神奈川県議会日タイ友好議員連盟で、タイへ初めての視察に行ってきた。一番の目的は、首都バンコクのスラム クロントイとそれらの生活支援をされているシーカー・アジア財団とドゥアン・プラティープ財団の調査です。

実は、この財団から、東日本大震災時に日本に対して多大なるご支援を頂きました。プラティープ財団の秦代表を先頭に、募金箱を持ってスラムの各家を訪問。1日の収入が200バーツ（日本円で600円）、そんな中から20バーツ、30バーツと寄付して下さいました。このスラムに住む15万人分90万円、集まったと聞いています。

あるご婦人は、寄付をしながら「過去は変えられないけれど、未来は変えられる。だからぜひ復興に役立てて欲しい」とおっしゃり、復興への気持ちを込めて、募金箱にお金を入れて下さいました。そんな皆さんの気持ちにお礼を言いたい…。そこで、私たち議連のメンバーで、ランドセルやピアノを贈る事にしました。このランドセルは、東日本大震災で被災した子どもたちに全国から寄せられたもので、東北の子どもたちに行き渡ったあと、「他の国で、同じように困っている子どもたちに使ってほしい」と預かってきたものです。

団長の敷田博昭議員のご尽力で約250個、横浜市内の業者のご協力でサイズを合わせた段ボールに入ったプレゼントになりました。



追記

今回の視察では、神奈川県がいま進めようとしている医療ツーリズムの先進例、タイの投資政策・日本企業のアユタヤでの洪水からの復興、世界遺産アユタヤ遺跡などを調査しました。詳細については私のブログ「微笑みの国①～⑤」をお読み下さい。そのほか元外務大臣のお二人と意見交換も行い充実した視察となりました。（日タイ友好議員連盟のメンバーは超党派20名で行いました。）

タイの貧困者は現在、人口の約1割にのぼると言われています。経済発展が著しいタイ。しかし、その影で、スラム地区では、麻薬・HIV・居住権・環境衛生・就労・就学など数多くの問題が残されています。

そんなスラムの一つ、タイ国最大のスラム クロントイを訪れました。このスラムだけでも15万人の住民が生活しており、日本でいえば約一都市分、もしくはそれ以上に相当します。このスラムの諸問題解決のために活動している二つの団体を調査。



「シャンティ国際ボランティア会（SVA）・シーカーアジア財団」と「プラティープ財団」は連携しながら、タイをはじめカンボジア、ラオス、アフガニスタン、ミャンマーの社会弱者対策を中心に活動しているNGOです。（写真はシーカーアジア財団の移動図書館）

シーカー・アジア財団のシーカー(sikkha)とはパーリ語で”教育”という意味。子どもたちへの教育支援をはじめ、移民労働者や女性、少数民族の生活支

援・教育支援を通じて、社会的自立を促す為の支援を行っています。

ドゥアン・プラティープ財団ではプラティープ・ウンソンタム・秦さんより様々な事象についてお話を伺いました。秦さん自身が、スラム、クロントイ地区に生まれ育ちました。『教育こそが生活を大きく変える原動力になる』と確信し、1968年13歳の時、姉のミンボンさんとともに、スラムの子どもたちに勉強を教え始めました。

学習を通じ自立と社会参加を促す取り組みに専心した秦さんは、『スラムの天使』と称賛されました。長きにわたる活動が認められ、1978年、アジアのノーベル賞として名高い「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞し、その賞金すべてを投じてプラティーク財団を設立しました。

当時、顕著となった貧困問題や麻薬問題に取り組み、2000年から6年間、上院議員として教育や福祉問題を国会のなかで問題提起し、解決にむけて尽力されました。今も精力的に活動を続けていらっしゃいます。

（写真はランドセル、ピアノ、歯ブラシなどをプレゼントしているところ。なぜか鯉のぼりも）

経験に裏打ちされた秦さんのお話に、引き込まれ、是非、彼女たちの取り組みを神奈川県でも取り入れたいと感じました。

スラムを訪れた翌日、富裕層が利用する医療ツーリズムを視察して、バンコクの光と影、その陰影はきわめて深いと実感しました。

